

第28回村野藤吾賞選評

### 繊細な介入

乾久美子

犬島には、御影石の採掘跡にできた池があちこちにある。また、島内には10年ほどしか稼働することのなかったという銅の製錬所跡(現「製錬所美術館」)もあり、数10mしか離れていない犬ノ島にはプロパンガスの着臭剤を製造する工場がある。つまり犬島は伝統的に工業を中心に生きてきた島であるようだ。だからなのか、家屋を構成する素材にも、いろいろな色のトタンなどが使われていたりもする。また、集落全体の高齢化のため、ただでさえ少ない数の家屋が次々と取り壊されつつある。そんな風景の中に、妹島さんの「家プロジェクト」の家々6棟が点在している。

#### 木造家屋の再生とアクリルとアルミの東屋

6棟のうちの3棟は、そこに建っていた家屋の材を再利用し、家屋らしいスパンの架構をもつ木造となっている。ただし、随所に通常の木造らしからぬディテールが採用されていて、重い瓦を載せているとは思えないほどに、軽やかな建ち方をしていた。特に芯をはずした耐力壁や足元の貫など、水平力の処理の大胆さは目を瞠るものがあり、現代の厳しい構造規定に従いつつも、伝統的木造建築に通じる研ぎすまされた清潔さを獲得していた。まるで、木造自身がこうありたいと願っていたかのような姿だ。こうしたものを一度見てしまうと、現代の一般的な木造建築が、いかに無自覚に無駄な要素で武装してしまっているのかが分かる。単純な木造がここまで新鮮な存在になり得ることを証明する、実に妹島さんらしい批評精神溢れる建築だった。

しかし、こうした先鋭的なつくりの木造なのに、驚くほどに周辺の風景と調和していた。脆く儂い要素が寄り添う風景の中で、同じぐらいの「弱さ」を獲得している。こうした姿が望まれたのは、周辺の簡素な木造家屋との親和性を最大限に考慮した上のものである。

今回の木造が、これまで妹島さんがつき合ってきた構造家ではなく、いわゆる古民家再生(一般的にはかなり様式化した世界であるが)の専門家との協働で生まれたという経緯にも、また、最適な職人を確保するために妹島さんの事務所が元請けとなり分離発注したという経緯にも、敬意と共に新鮮な驚きを感じる。

歯抜けとなった更地に建つアクリル造の2棟やアルミ造の東屋

はどうだろうか。どちらも構造的に先鋭的な試みが発揮された建築である。にもかかわらず、不思議とそのことはまったく気にならず、おそらくはその所有者自身によって周辺の家屋の菜園に無造作につくられている小屋やベンチや椅子(驚くべきことに、採石の島だけあって石でカジュアルにつくられていた)と違っていながらも、相反することがない不思議な風情がある。

スケールが注意深く抑えられていることと、工芸的といっていくらいに洗練されたディテールの採用が、現代の建設が引きずる無骨さを希釈しているからだろうか。工法もさることながら、この風景への溶け込み方は批評的である。

#### 生活の文脈の再生へ

では、こうした批評性が、集落に対してどういう意味があるのかということも考察しておくべきだろう。

家プロジェクトは限界集落全体をミュージアムと見立て、廃屋になったものから、順次ギャラリーへと転換していくというプロジェクトだ。廃屋になる理由の大半はそこに住んでいた住民の死であることから、瀬戸内海に浮かぶ小さな島の営みに都市的なセンスで介入してしまうことはデリケートな問題をはらんでいて、本プロジェクトを誌面等で知った時、私はその「介入」の潜在的な暴力性を心配していた。

しかし、現地を訪れてみたところ、そんな心配は無用であることが分かった。本プロジェクトは現在も進行中で、妹島さんはスタッフと共に現地に足繁く通い続けているとのことだが、現地の文脈の中に自らを長期にわたって身体的に位置づけて島全体を理解しようとする態度は、フィールドワークのために現地入りする文化人類学者のそれと近い。介入が暴力性を宿すかどうかは、なによりもまず、現地の人びとが矜持を保つための配慮がなされているかにかかっているが、細心の注意を払いながら、挿入する建築物を周辺環境にマッチさせようとする妹島さんの注意深く礼儀正しいデザインは、現地との関わり方として適切であるように感じた。

それだけでなく、文化の多様性や柔軟性を、文脈を失うことなく受け入れられるかも重要だと思われるが、「家プロジェクト」での工法や素材の選択、協働のあり方は、それを実的に達成している。「家プロジェクト」における設計のあり方は、犬島の現状を受け入れるだけではなく、高齢化に蝕まれて失われつつある生活の文脈を再生しようとさえしている。

限界集落という難しい問題を現実として向き合い、注意深く介入していくことは、配慮深い建築家であれば身に付けるべき態度であり、妹島さんだけに見られるものではないだろう。しかしながら、その文脈の読み取りの精度、介入の態度の繊細さと、結果として生まれた建築の魅力は特筆すべきものがある。ここに、建築家の新しい規範を見る気がした。